

令和 7 年度第 1 回函館市男女共同参画審議会会議録	
開催日時	令和 7 年 4 月 1 6 日 水曜日 1 8 時 0 0 分から
開催場所	函館市役所 8 階第 2 会議室
議 題	議事 (1) 函館駅前東地区市街地再開発事業における公共施設の整備について (2) ジェンダーギャップの解消に係る取組みについて
出席委員	池田会長，木村副会長，石川委員，塗委員，海原委員， 佐々木委員，永井委員，大宮委員，中村委員，水島委員 (計 1 0 名)
欠席委員	荒木委員，服部委員
傍聴者	なし
事務局	柏市民部長，増輪市民・男女共同参画課長，關主査，三上主査，工藤主事
会 議 内 容	
1 開会	
会議成立の報告	
事務局	条例施行規則第 1 2 条第 7 項の規定により会議が成立していることを報告した。
委員の退任と就任	
事務局	成田委員の退任および後任として永井委員の就任を報告した。
2 市民部長あいさつ	
部長	会議開催にあたり，市民部長からあいさつを行った。
3 議事	
(1) 函館駅前東地区市街地再開発事業における公共施設の整備について	
池田会長	それでは議事(1) 函館駅前東地区市街地再開発事業における公共施設の整備について，事務局から説明をお願いします。
事務局	《資料 1 に基づき説明》
池田会長	今の説明について何か質問等はあるか。
佐々木委員	一点確認だが，この建物の設置場所は津波の浸水区域であるが，公共施設が移ること等については，総務部の災害対策課から何か意見などはなかったのか。
事務局	現時点での建物の整備の協議の中では，特に問題ないものである。 市のまちづくり計画の一つで立地適正化計画というものがあり，この地区は，居住や商業などの都市機能を誘導する区域と位置づけており，多数の方が利用する施設となる。災害時は上方に避難することになるため，防災上は特に問題ないと考えている。

佐々木委員	調理室の機能については、中途半端なものを作るよりは近隣の施設で代替してもらうような方向がいいのではないかという意見もあったようだが、女性センターの調理室の機能についてあれほどの施設を備えているところは近隣にはないと思うため、現在利用している方達の方向性としてはどうなるのかということと、災害があった時に避難する方たちを受け入れる場所となっているので、例えば炊き出しのための調理場が必要だということもあるので、そういうことについてもこれから計画は進んでいくだろうと思うが、市民の皆さんの希望を全てかなえるのは難しいと重々承知の上であるが、目的に沿った内容に近づけていただけるような、計画の進め方をぜひお願いしたい。
事務局	移転先のことについては、今後、市内部関係部局と調整をさせていただきたい。また、ご指摘のあったキッチンについては、女性センター並みの施設を新たな施設に整備するとなると、レイアウトや機能の部分で厳しいということも考えられるが、今後、関係部局と調整をしていきたい。 一点、使える使えないは別として、朝市ひろばの2階にかなり大きいキッチンスペースがある。私も経済部にいた時にそこを整備させていただいたのだが、利用率は高くないようであり、そういう施設もあるということをお伝えしておく。
(2) ジェンダーギャップの解消に関わる取組みについて	
池田会長	他に意見がないようなので、議題(2) ジェンダーギャップの解消に関わる取組みについて事務局から説明をお願いする。
事務局	《資料2に基づき説明》
池田会長	何か質問等あるか。
木村副会長	おおまかなスケジュールについて理解した。まずは既存の調査を踏まえて、ジェンダーギャップにかかわる要因分析が行われるということである。希望の話になるが、常にこの審議会で調査結果などを報告いただくということであり、具体的にはどのような分析が行われる予定であるか。今、お話しできる範囲で結構であるので、伺いたい。 また、テレビ番組で、外国の方が花見で行きたい場所の第1位は目黒川だったが、2位は五稜郭公園であり、観光で行きたいという希望がかなり高いのだが、住んでいる方の満足度、幸福度が低いというかなり難しい現象が起きているのはご存じのとおりである。そこにはジェンダーの問題が関わっていると思っているのだが、私がいる北海道教育大学の学生たちも「函館市で暮らし続けたい」、「就職してここに居続けたいけれども・・・」というが、「けれども」の後を濁して教えてくれない。その部分が何なのかというのは、大学関係者としてもすごく気になっている。学生がなぜ定着してくれないのか、つまり若者、若年層の人たち、特に女子学生も含めてその人たちがなぜ、函館市に居続けてくれないのかということは、市内のいろいろなところでの大きな課題だと思っている。詳しい分析をしていただき、それでその要因をそれぞれの分野で手分けをして進めていけるような態勢も確保していただければと願っている。

事務局	これまで函館市で色々なアンケート等を行っている。例えば地方創生に関するアンケートなどで「函館市の中で望むものは何か」といった項目を聞いており、明確に示すものはなかなかないが、簡単に言ってしまうと、大学への進学にあたり自分の求めている学校がないために首都圏などの大学に進学をして、そのまま就職し定住する傾向があることが考えられる。特に若い女性等については、いわゆる遊ぶ場だとか、仕事のみならず、その後の生活の考え方によるのではと思っており、そういったいろいろな要素を複合的に分析しながら、函館市が選ばれるまちになるには、どのようなことが必要なのかについて分析して、審議会等の皆様とも共有し、意見をいただきながら進めてまいりたいと考えているところである。 追加で、副会長から調査の概要というようなお話もあったが、まだはっきり決まったものはない状況である。函館の場合、転出した女性が函館に帰ってくる率が非常に低いという状況があり、それが人口減少に繋がっている部分も大きいことから、その要因をまずいろいろな調査から分析しましょうということと、先ほどもお話がありましたが転出する女性にアンケートだとか、話を聞くような手立てを考えたい。途中経過になると思うが、この審議会にも詳細についてはご報告させて頂きたいと考えている。資料には書いていないが、挨拶でも申し上げた、国が地方創生2.0で若者・女性の関係に力を入れるということで内閣官房で“若者・女性に選ばれる地方の取り組み”を実施する自治体の募集があり、函館市も手を挙げたところ、幸いにも採択をされた。今後、6月以降の動きになるが、その中で、国の支援として、他の自治体の取組みの紹介や専門家の紹介などいろいろなサポートを受けられるということもあるため、国のサポートも受けながら、どのような形がいいか固めていきたいと考えている。
中村委員	今の話に追加する形にはなるが、函館の若手、大学生向けに函館の企業を紹介する“HAKODATE KAKKI”というサイト等を運営しているところがあり、高等教育機関の学生も関係して活動をやっていると耳にした。先行事例などとして参考にさせていただければと思う。
事務局	仕事のことにについては、経済部の雇用労政課が所管しているが、このプロジェクトに入ることににはなるので、その辺の話も含めて、いろいろ探っていきたい。
佐々木委員	ジェンダーギャップ解消プロジェクトには大変期待しているが、平成24年に函館市の国内研修事業が廃止されて以降、この審議会でも何度かお願いしたが予算不足により実現してこなかった経過があり、市内で男女共同参画を学べる場がないと感じている。そのため、女性会議のメンバーも基礎的な知識を持たないまま活動している状況がある。女性会議の事業運営自体は可能でも、活動の本来の目的が十分に共有できていない。現在の子どもたちは学校で学ぶ機会がある一方で、すでに社会に出た大人たちが男女共同参画について学ぶ場がないのは非常に残念であり、何らかの形で学びの機会を設けてほしいと強く願っている。 また、先日、東京から小さいお子さんを連れて移住してきた方から理由を伺ったところ、コロナで外出が難しくなった時に、近所の公園に遊びに行くと、非常に混雑しており、こんな人込みの中では子育てを出来ないと思い、移住先を考えた結果、函館が空港からのアクセスの良さや、食べ物がおいしかったこと、住んでいる方の情報をたくさん手に入れることができたため、迷わず函館に移住してきたという話を伺い、すごく魅力的だと思ってもらったと思うが、住んだ後にどうなのかというところが、気になっているので、それもあわせて、できれば基本的な学びの場を何とかしていただきたい。
事務局	男女共同参画社会の形成という部分については、市民部で所管しており、まだまだ足りないが、男女共同参画フォーラムの開催などの事業をやらせていただいている。もっと市民の意識を向上させる必要があるという観点で、今回のプロジェクトには関係部長に入ってもらうが、生涯学習部長も入ってもらおうと考えているので、そういう生涯学習の観点からも、プロジェクトの方で詰めさせていただきたい。

池田会長	他に意見等はあるか。
塗委員	女性がお仕事に就き、活躍していくということは素晴らしいことであるが、現実、上に上がって行けた方達の年代は、女性にとって妊娠・出産・育児その時代と重なってしまう。そうすると、例えばお父さんとお母さんが一生懸命子育てを協力してやっても、お母さんの体の方が参ってしまうという事がある。私が知っている方の中には1人目は何とか育ってきたが、2人目をという時がきたら、お母さんも中間管理職の立場にいらして、仕事も家庭も頑張っていたために、赤ちゃんがせっかくお腹に宿ったのに関わらず、お母さんの体に無理がかかり、赤ちゃんをどうするかと医者に迫られたという実際の話があった。私の回りではちょうど娘とか息子の世代や友達たちがちょうどその年代に当たるので、結構そういう話を聞く。そうすると、実際はお仕事についていたい。自分が子供に誇れる仕事を持っているということはもちろんあるが、自分の体を痛めてでも、もしくは悲しいことに医者にどうかしていただくかっていうそういう選択まで迫られた人たちの話を聞いてると、何か子育て、それからお母さんの体をもう少し社会的にフォローしてあげられるような、そういうふうな点を持っていたいただければと思っている。
事務局	このような不幸なことが起きないように、市の方で男女共同参画社会をまだまだ進めていかなければならないと思っている。職場・家庭・地域、全てにおいてジェンダーギャップが解消されることが本当に重要な事であるので、それに向かって施策を展開してまいりたい。
池田会長	ほかに意見等あるか。一人一言ずつ発言していきましようということだから、ジェンダーギャップについて永井委員から発言を願う。
永井委員	私が所属している法人会で、2年前、教育大の学生さんをお呼びして、人口減少について考えようということで、勉強会をやったことがある。若い方の声を聴くと、やはり遊ぶ場所がない、交通が不便だとかいうような事が結構聞かれた。我々もいろいろな気付きや感じる部分が多々あったので、市として、なにかそういうような、先ほど佐々木委員がいていたような、勉強会やグループワーク、セミナーなどをどんどんやっていただいて、若い方の生の声を聴くことによって、分析の手掛かりになるようなものが見つかるのではないかと感じた。
大宮委員	ジェンダーギャップの関係については、今年の2月に北海道議会でも質問が出ている。世界経済フォーラムが発表したジェンダーギャップ指数で、日本は世界の中で125位というような結果になっており、例えば北海道の本庁の部長課長級以上の女性管理職の割合は、令和5年度が7.4%で、6年度は8.4%と多少上がっている状況。市町村は道よりもう少し高く、令和5年度が14.7%で、令和6年度が14.8%、いずれも上がってはいるが、まだまだ本州に比べると少ないという状況である。ジェンダーギャップの解消が進まない要因は、市からも話があったが、依然として固定的な男女の役割分担意識や無意識の思い込み・アンコンシャス・バイアスが根強かったり、地域性というものもあるのではないかと、議会の方で答弁している。道としては、行動計画の中で、女性活躍推進だとか、男女平等参画を促進することを示しており、女性活躍推進セミナーを開催するなど男女間の様々な格差の是正について各機関と連携しながら進めてまいりたいと考えていることから、ジェンダーギャップ指数を少しでも上げるような取り組みを進めていきたい。

水島委員	私は東京の企業で25年ぐらい中間管理職として勤務しており、6年前に函館に移住した。函館は非常に住みやすく食べ物もおいしくてというのはあるが、ただ、東京と地方の差というのをすごく感じるし、私の周りにいらっしゃる皆さんも函館はこういうところだと、固定概念というかそういうのがある方が多いように感じている。現在では学校教育で男女共同参画の学びの場があるが、私はSDGsを学んだこともきっかけとなり、この委員に応募したのだが、多分、昭和の時代を生きてきた方たちは、古いままの固定概念を持っていて、市民の方々や市が一生懸命いろいろなさっけていても、なかなかジェンダーギャップ、ある程度ギャップを作り出しているような人たちのところには伝わっていないように感じている。企業に属していないような方々はそういったことを耳にする機会もないかと思うし、関心も薄いと思うので、そういった方々に届くような活動をしたらどうかと思う。 ジェンダーギャップとは話は変わるが、ふるさと納税をしていろいろな所の資料を取り寄せた時に、その地域の企業のPRであったりとか、ちょっと行ってみたいなと思うような資料をたくさんいただく。ところが、残念ながら函館のは目にする機会がないので、市の方でそういったところで、地元の企業さんを盛り立てるような資料を作成してふるさと納税の返礼品と一緒にお出しになるとか、そういうことも、もうすでになさっているかもしれないが、いただいた方は眺めたりするだろうし、特に函館市はすごく人気の都市だと思うので、もうちょっといろんな方の目に触れるような資料を作られたらいいのかなと感じている。
池田会長	今の水島さんの意見について、事務局から何かあるか。
事務局	ターゲットという部分でお話すると、市民部は町会も担当しており、町会さんといろいろな懇談をする機会があるが、比較的年代の高い方が多いことから、ターゲットとして町会の方もいいかなと、お伺いしながら思っていた。ふるさと納税の部分もまだ足りないと思うが、納税額が増えているので、対象者も増えていくであろうから、関係部局と共有したいと考えている。
海原委員	私は団体の女性委員会に属しているが、主に函館方面の会社で働いている女性の方が集まって色々活動している。働きながら出産・育児をされてる方がいらっしゃるやとか、親御さんの介護をされている方達もいらっしゃるが、函館市のどういう制度を利用出来るかを調べたいと思ったときに、自分の欲しい情報にたどり着くまでに時間がかかるというか、多分、働いてる会社の方でもいろいろな制度があって、分かっている方がほとんどだと思うが、それ以外にも函館市のそういう困ってるときに助けてもらえる制度にたどり着くまでに、自分が対象になるかについてなど、調べるのにすごく時間がかかる。昨年度から市政はこたてがリニューアルされてすごく見やすく、分かりやすくなったと思ったが、ホームページはまだ変わっていないと思っている。出産する年代の方は、紙媒体よりも自分でスマホで調べたりという方が、時間もかからないし、多いと思うが、何かまとまってそういうのが一覧になってすぐ自分の欲しい情報が手に入るようになったら、もっと良いなと思う。
事務局	今、市でも公式LINEを始めており、子育てなどの項目を作ったりしている。まだこれからの部分もあるが、見直ししながら市民の皆さんに分かりやすいようにしていきたいと取り組んでいる。また、今年度から出来ると思うが、子育て、福祉、ジェンダーも含め、市の政策として、こういう施策があるとパックにしてお示しできるようなことを庁内で検討しており、できるだけ早くご要望に近い形で発信できればと思う。

石川委員	私は小学校の校長であるが、休み時間に子どもが来て、「校長先生、駒場小学校で初めての女の先生だね」というので、どうしてかと尋ねたら、校長室にある写真が男の人ばかりということであった。前任校は何人か女性の校長先生がいらっしゃったが、私は、函館の高校を卒業して関東の方に行ったが、北海道に育ててもらったので、恩返ししたいなと思って戻ってきた。本日、若い方が戻ってこないというお話を伺って、自分は教職員として何をしてきたのかなということであらためて振り返りながら話を聞いていた。 私たちの業界はどちらかというと男性も女性もなく働かせていただいていると思うが、女性管理職の登用については、道教委も市教委も応援してくださって、取り組んでいるところである。女性職員は大変優秀で、保護者の方々にたくさん助けていただいているので、その支えになるように学校でなにができるのかということを変えて考えさせていただく機会であった。私はどちらかというと、自分の勉強不足をここにいて恥ずかしいなと思っていたが、先日、校長会にも大泉市長がいらっしゃって、函館市の未来についていろいろ語っていただき、共に歩んでいこうという姿勢を伺って、頑張らなければと思っていたところである。最後、先ほど生涯学習部のお話も出て、学校教育としても、生涯学習部と連携しながら、ジェンダーギャップについて子どもの学びを深めて、子どもたちが社会に出た時に、今委員の方たちがおっしゃった学びの場を自分たちで作り出すような、函館市民となるように学校として頑張っていきたいと思った。
池田会長	小学校長会の方から前向きな意見があったので、プレッシャーを感じている。先ほどジェンダーギャップのところの経営者や若者を対象としたワークショップがでてきているが、経済と連携するとかそういったことをやる可能性はあるか。
事務局	まだ具体的にはなっていないが、今日のご意見も参考にしながら、2回か3回はできればと考えている。いろいろな立場の方のワークショップを開催させていただきたいと思っている。
木村副会長	教育大学の学生も地域に出ており、課題解決のために地域プロジェクトを組んで動くということが得意な学生たちであるから、ジェンダーギャップの解消についても大変関心のある学生は潜在的にいると思う。函館校は、今、D&I、ダイバーシティとエクイティとインクルージョンをもっと打ち出して職場環境の改善を含めて学生の教育研究、教職員の教育研究、職場での活躍そういったものをもっと強く見直していかなければならないと言っており、見ているところは同じなので、協力体制が必要なところがあれば、協力していければと思う。
池田会長	そこに市長とか、副市長とか、各部の部長さんとかがアドバイザーで入っていくと、先が見えるような話し合いができるようになると思う。それと、学生の「残りたいけれども・・・」の続きの部分が少しずつ解決していくんじゃないかと思う。 実際、私の学校の生徒も卒業して市外の大学とか専門学校とかに行って、そっちの方で就職してしまう。幼稚園の先生とか、保育士とかが足りないからと卒業生に電話をかけても卒業生から返ってくる言葉はたった4文字。「食えない。」こっちに家があるなら家から通えるだろうし、給料は東京や札幌より少し安いけれど、食っていけるでしょうと言っただけけれども、今度は、手当とかの部分も違ってくるから、やはり「食えない。」ということになる。働く企業がたくさんあればまた別なんだろうが。企業誘致とかそういうところも考えていかなければいけないのではないかと思う。今、看護学部の話が出てますが、これができくるとまた少し流れが変わってくるかなと期待している。外部からもたくさん人が入ってくるかなと、そういう感じでみているので、ギャップも縮まってきて、解消されてくれば一番いいのかなと思うので、ぜひ頑張ってもらいたいなと思っている。 他に意見が無いようなので、以上でマイクを事務局にお返しする。
塗委員	次の開催予定はいつ頃になるか。
事務局	次回は7月か8月頃を想定している。
4 閉会	
事務局	【閉会】